

## 水みちを追って

利根川東遷・荒川西遷と葛西用水

現在、利根川は群馬県の大水上山を源にして南流し、埼玉県の北辺を東流して銚子に下ります。埼玉県甲武信ヶ岳に始まる荒川は、大宮台地西方を南流、東流して東京湾に注いでいます。二つの川が変わることはありません。

しかしかつて利根川と荒川は一緒に大宮台地西方を流れていたこともあり、大宮台地東遷盆地運動で加須低地が生まれ、大宮台地東方に移つてからも、必ずどこかで一つになって東京湾に注いでいました。

その利根川と荒川を現在のように引き離したのは、江戸開府にあたり幕府の広域行政最重要課題として取り組まれた「利根川東遷」「荒川西遷」事業によって。その理由は、武蔵東部低地の治水と水田開発、水士交通網の確立、東北諸藩に備えて利根川を北関東の外堀にするなどいろいろ言われています。でも最大の目的は思川や渡良瀬川、利根川、荒川が合流し乱流する河川の氾濫原を人が住める土地にする、「可住

地」にすることだったと思います。

利根川東遷、荒川西遷の過程を見ていくと、流路跡が順次農業用水路に変わっていくさまが分かります。自然のままの河川では危険で近づけません。自然の河川を人工の用水路に変え、流域の水を制御できるようにすれば、安心して水利用ができるので水田が増え、村数も増えます。実際、日本一広い氾濫原を日本一広い人の住める平野に変貌させました。

とはいえこの氾濫原の水系を一気に変えることなどできませんから一歩ずつ付替えていきました。利根川東遷の一応の完成でさえ六十年余の歳月を要し、その後も江戸時代を通じて、さらには明治以降現在まで、利根川・荒川の流路跡の治水事業は続いています。

この間この一帯では川筋が変わり、河川名が変わり、河川と用水路が混在し、と複雑になっただけではなく、この土地をつくった利根川・荒川・渡良瀬川・思川を記憶から消し去るような「中川流域」と呼ばれるようになって、学ぶための糸口も見えなくなっていました。でも、私たちが分からないから、遠い昔の話だからと無視しても、自然は忘れていません。

そこで、この流域をつくった利根川や荒川、渡良瀬川、思川の、なかでも主役となった利根川・荒川の流路変遷と、入替えに整備されていく農業用水路網を追うことで、難解なこの流域理解に挑戦してみました。ただ、先史時代はもちろん歴史時代でも年号等諸説ありますので、概略としてご理解ください。今号では江戸時代末まで、次号で明治以降現在まで紹介します。



右：元荒川  
左：逆川用水路（旧瓦管根溜井）。  
左方手前から八条用水、東京葛西用水、  
谷古田用水の元坎。  
撮影（2011年1月）：宗形 慧